

第2回 国会等移転とちぎセミナー

テーマ	: 「持続・共生・創造」のテーマパーク都市
サブテーマ	: 「持続」
日時	: 平成11年1月22日(金) 13時15分から16時
会場	: 小山グランドホテル(小山市)
主催	: 栃木県・栃木県首都機能移転促進県民会議
コーディネータ	: 藤本 信義 氏(宇都宮大学工学部教授)
パネリスト	: 露木 恵子 氏(宇都宮大学教育学部教授) 根岸 博 氏((元)足利工業大学教授) 福澤 宗道 氏(足利工業大学建築学科教授) 柳川 高行 氏(白鷗大学経営学部教授)

【敬称略】

藤本(コーディネーター):

よろしくお願ひ致します。まず、このセミナーの進め方についてですがございますけれども、前半は各先生方から、移転の意義、新都市、首都づくりの考え方について、ご専門の観点を入れながらだいたい15分程度でご提言、問題提起をいただきます。一巡しましたところで休憩に入ります。各先生方のお話に関して、ご意見、ご質問がありましたら、皆様のお手元の意見表にご記入の上、休憩の時までにご受付の方に提出していただきたいと思ひます。その後、皆様方より、出されましたご意見なども交えまして、後半の議論を展開していきたいと思ひております。また、会場の皆様方と意見交換をしたいと思ひます。以上のような内容で進めて参ります。

それでは、さっそくセミナーのほうに入りたいと思ひますが、各先生方から、ご発言をいただく前に、私も日頃、いろんな機会に県内の街づくり等に関する立場でございますので、私の考えも最初にきっかけとして、お話をさせていただきます。問題の立て方ですが、私は、3つあると思ひています。

一つは、かなり総論的なこととなりますが、首都機能移転の必要性、或いはその問題といったようなことです。この調査対象地域の中で、特にこの栃木県は北東地域4県の中に含まれておりまして、那須野が原地域の可能性というようなことですね、つまりは、この調査地域の適否に関する論議というのがあるかと思ひます。

それから、二つ目はですね、今度はその北東地域、那須野が原を前提とした場合のこの県南地域の関わり方が、今回の中心になっていくのではないかなというふうに思ひます。県北16市町村がこの調査地域の中に入っているわけですが、その16市町村の中でも、その温度差があると言われております。いわんや、この県南地域においては果してどうなのかということですね。もし、那須野が原地域にということになればですね、これは東京都の重都構造、しばらくは東京都重都構造でいかななくてはならない、そうしたなかで中間をしめる位置にあるこの県南地域これが無関心であってよいのかと、特にこの選定基準の中で政経分離と言っているわけでございますが、この基準をどう評価するかですね。分離といっても経済の方がどんどんこの県南地域まで押し寄せてきて問題が生じないのかどうかといったようなことですね。これが2つ目の課題といひますか、問題の立て方の一つになるでしょう。

最後に、3つ目ということですがけれども、この北東地域と特に那須野が原地域、那須野が原にという話になった時ですね、この那須野が原地域に何らかの影響を受けながら、新たに創造すべき21世紀の都市構造とはいひたい何なのかということですね。これはもう県南地域だけではなくて県全体にも関わる課題であろうというふうに思ひますが、平成7年国会等移転審議会の報告では、この新首都づくりの理念が平和、文化、3つ目に環境ということですね。こうした理念を受けて県の方では、この持続・共生・

創造というサブテーマを設けておられるわけです。さらにまちづくりのあり方ということですね。これは県南地域もこれから特に持続、発展というようなことを考えた時に問題になってくる部分ではなからうかなというふうに思うわけです。

都合、3つの問題の立て方を念頭にいれながら、これから先生方のお話を伺ってみたいと思います。まずは、かなりこの総論的な立場、私たちの大先輩であります根岸先生のほうから、お話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

根岸(パネリスト):

ご紹介いただきました根岸です。今回は行政担当の方が多いとお聞きしていますので、主として実務面からの提案ということで話を進めていきたいと思います。特に今回のサブテーマが持続ということになっておりますので、持続可能な都市づくりから入っていきます。

現在、地球環境の悪化のために持続可能な発展が危機に立たされております。人口、食糧、地球温暖化、酸性雨、オゾンホールとどれをとらえてみても深刻な問題を提起致しているわけです。それでは困るということで地球サミットが開かれています。そのキーワードは持続可能な発展ということでございます。

これからは、どうしても、環境を保全するという方向に皆で努力していかなくてはなりません。このような状況の下で新しい首都をつくる場合、どのようなタイプでいくべきかとなりますと、省資源、省エネルギー、リサイクル型の都市が持続可能な都市につながっていくだろうと思います。そのためには、環境にやさしい都市をつくるということになります。したがって、そこで限られた資源を効率よく活用する、あるいは太陽光発電、太陽熱利用と地熱の利用、ゴミ発電というようなことを実用化致しまして、エネルギー循環型の都市を是非つくっていかねばなりません。特に少子化高齢化社会でございますので、従来の成長拡大型の都市構造は、もうやめるべきでしょう。これからはやはり、既成市街地成熟型のコンパクトで環境負荷の少ない都市をつくって行こうということになるわけでございます。最近特に脚光を浴びています、那須野が原のハーモニーホールの運営手法が持続可能な都市づくりにつながるであろうと考えています。このやり方を連合都市といいますが、私どもが生活するのに必要な都市機能、近年の社会情勢の変化によりまして市民は生活の豊かさを実感するということに強い要望を持っています。したがって、従来の都市機能だけでは不十分ですので、それに加えまして、新たに高次の都市機能を強く求めています。高次の都市機能は、高等教育、高次の文化・芸術あるいは高次の医療・情報等の機能を言いますので、その機能を各都市が全部持つということは事実上不可能であります。したがって、ある一定の区域のなかの都市が相互に話し合うことによって、その高次の都市機能を多核・重層的にお互いに分担しあい、全体としてみれば総合的な高次の都市機能を備えている都市群をつくる、その都市群を連合都市と、こういうふうに私は言っているわけでございます。その連合都市が十分に機能するためにはその都市間を結ぶ交通であるとか、通信であるとかを、利便性・耐震性の高いもので有機的に連絡し一体的な活動ができるようにしなければいけないだろうと考えております。

具体的には、ここではどういうまちで連合都市を構成するかということになりますと、新しくつくる首都とその周りの都市で組み立てます。まず、黒磯、大田原、矢板それに塩原、西那須野の3市2町で、一応連合都市を構成することを考えております。

連合都市相互間では、どういう機能を分担するのかとなりますと、政治行政機能と国際政治機能とは当然新都市の負担になりますが、文化学術交流機能と都市運営機能は極力周辺都市で分担してもらい、出来るだけ新首都をスリム化する必要があるかと思えます。ただこの時、連合都市の中の周辺都市では、まちづくりの理念、都市づくりのマスタープランがありますので、それに反する機能は引き受けないということが大切であります。また、新首都に新しく企業が入ってまいります、その企業は、入る

にあたっては周辺の都市の中小企業と共存共栄する、周辺の商店街と共存共栄するということを念頭に経営戦略を立てて参入しなければならないということを今日強調しておきたいと思います。

さて、新しい首都づくりであります。その構成を考えてみますと、国政都市と国際交流文化学術研究区の小さい都市は、新しい首都に配置することいいたしまして、それ以外の地域文化交流区であるとか生活拠点都市というのは、少なくとも連合都市のなかの周辺都市でその大部分を背負うという形になるかと思えます。

次に、新しい首都の規模の問題になるわけです。どのような規模の都市をつくっていくかということですが、まちづくりを致しませぬ場合には、そのまちの将来計画を念頭において規模を決めるわけでありませぬ。規模の具体的なものは何か。それは人口と面積ということになります。

まず、人口から入りたいと思えます。新しい首都をつくってとりあえずなんとか首都の働きができるのを第一段階としますと、10年位かかると思えます。その時の新しい首都の人口は、大体の感じで申し上げますと10万人程度で間に合うのではないのでしょうか。その時、周辺の3市2町の現在人口が20万人ですので、新しく出来る新首都の10万人を加えまして、連合都市としては30万人程度の人口でスタートすることになるのではないかと思えます。

ところで、新首都が、成熟の段階に達したときの適正人口を考えますと、経済は東京に残し、政治だけけるわけですので、出来るだけスリム化しようということからいいますと、新首都の適正人口は大体、30万人程度になると思えます。更に、3市2町の周辺の都市が現在20万人ですので、そこに10万人程度を受け入れることにしますと、周辺の都市だけで30万人になりますので、連合都市の人口は合計60万人程度になるのではないのでしょうか。更にまちをつくる場合、都市施設を計画します。都市施設を計画する場合に、人口を念頭に置いて、都市施設の規模の大きさを決めるわけですので、設計に用いるアッパーリミットの人口を決める必要があります。このアッパーリミットの人口は、連合都市の人口60万人ではなくて、新首都の適正人口が30万人に見合う施設を造っていくことが必要です。但し、立派な都市が出来ますと、首都へ、首都へと人が集まってきた施設がパンクする可能性があります。したがって、こちら辺は強力な立法処置で人口を押さえ、30万人以上はだめですということによってやらなければなりません。それでも集まってくる人口に対しては、栃木県全体で引き受けいくことが必要でしょう。

さて、人口が決まりますと、次は市街地の規模ということになります。市街地の規模を決めます場合には、土地利用計画を立てて、市街地の面積を決めるわけでございます。幸い、来るであろうということの那須は都市計画区域に入っています。したがって、現在、線引きはしてありませんけれども、受け入れたいならば線引きは必ずやらなければなりません。市街化区域と市街化調整区域に分けて土地利用計画を立てる。これが非常に重要なことになります。これがひとつ。

もう一つは、当然これだけ立派な都市をつくりますと地価が上がります。地価が上がって痛い目に合わないためにも地価の抑制をする必要があります。都市計画区域で地価抑制に必要な区域については、これを規制区域として指定することが現行法で決められています。それをピシッとしていかななくてはなりません。しかしながら現行法だけでは不十分です。どこが不十分かは、いろいろ研究していただき、強力な立法措置で地価の抑制等を図っていく必要があるだろうと考えております。

さて、次は、新首都づくりの核心に入って行きたいと思えます。従来の行政主導型のまちづくりから、住民主導型のまちづくりに変えていかなければいけないということが今日の日本の趨勢であります。ただ、新しくつくる首都には以前からの住民はおりませぬ。したがって、できれば私が申し上げた周辺都市で住民主導型のまちづくりをバッチリとおやりいただいて、それを参考にしながらその組織を見たり、方法を研究したりして新しい首都のまちづくりを進めていったらよいのではないかと思います。まちづくりをする場合に一番大事なのはやはり、土地利用計画これがピシッとしていなければいけません。したがって、新しい首都の核を形成する土地利用計画は、4つの区域に分けてお考え頂いた方がよいので

はないかと思います。一つは当然、市街地となるべき所、これは市街地地域ですね。それから次はその周辺ですね。農村の集落並びにその周辺地域を田園地域ということで位置づけます。さらにその外側の農業農村の維持育成を目的とした地域を、農業農村地域とします。それから最後になりますけれども、水源涵養とか森林資源の保護のための継続・保全地域が必要です。以上 4 つの地域を忠実に守りながら、発展させる必要があると考えています。

さらに、ここにつくる都市は、新首都とはいっても地方都市です。したがって地方都市の特性を多いに活用しながらつくっていくことが大切です。そのためには、生活空間がコンパクトにまとまっている地方都市の大きな特色を活用することです。特に住宅或いは、職場、学校、商店、病院等が限られた区域の中にまとまっていて、容易に短時間の間にそれを利用できるという利便性を持っていますので、それから受ける精神的なあるいは、時間的な余裕は、大きな一生の財産になると思います。このことは、是非新首都でも大いに研究し活用していただきたいと思います。更に快適な環境のまちづくりということですが、今あちらこちらで、人にやさしいまちをつくっていますね。これからつくるまちは、もうランク上げまして、そこに住めば、人が優しくなるようなまちにすべきだと思います。人が優しくなるためには、快適な環境の街が必要です。快適な環境の中でかなりの大きなウエートをしめているのが美しい街です。したがって、これからつくるまちを是非とも美しい街にしてください。街を取り囲む山、川、緑の自然の美しさ、街を形づくっております街路なり、橋なり、公園等の人々が造った構造物の美しさ、更にもう一つ、その街に住む方々の心の美しさ、この三つが三位一体となって始めてトータル的に美しい街ができるわけでありますので、是非このような街をつくっていききたいと思います。

また、街全体を見た場合、全体のハーモニーとバランスが必要ですので、これからつくる街は、一戸一戸の美しさとともに、バランスとハーモニー面からも美しいまちに仕上げて行く必要があるかと思えます。

残念なことに、屋外広告物がどうも都市美を損なっています。これからは、都市美を一步進めるような、美しい屋外広告物が欲しいですね。

最後に交通機関の問題にはいりますけれども、新首都では計画の確定したものから、逐次整備をしていくという所謂、段階的クラスター型の開発方式を取ると思います。この場合のクラスターというのは、ひとつひとつの小さい都市のことです。そのクラスターを結ぶものは公共交通、特に L R T これを是非進めていきたいと思えます。L R T とは路面電車ですね。したがって、これからつくる新首都は自家用車が主体となって自由に動くようなものではなく、できるだけ公共交通機関を主力としたものにするのが肝要です。これがまた、地球環境の持続に繋がるであろうと思っております。以上で、私の話を終わります。

藤本：

ありがとうございました。

持続可能な都市作りから始まりまして、この新首都のあるべき姿について、全体的にかなり、網羅する総論というような位置づけで先生のお話をお伺いしました。国会等移転審議会、昨日おとといですか、第 15 回が行われたはずで、段々その内容も密度が高まってきている。ただ、今朝ちょっとインターネットを覗いてみたんですが、まだ、議事録は載っていないようです。特に、前回十四回ですが、下河辺発言の位置づけがはっきりしたようでございますけれども、特に危機管理ということに関してですね。かなりこの首都機能移転は、緊急性を要するようなことでの議論がかなり集中的に行われるようになってきているということがございます。そうした危機管理というようなテーマを中心に、次に柳川先生にお話をいただきます。宜しくお願ひします。

柳川(パネリスト):

只今ご紹介頂きました白鷗大学の柳川でございます。なるべく具体的な数字をいれながら、首都機能が部分的に移転される東京都の立場、それからそれを受け入れる新首都の立場というところから、議論をしていきたいと思えます。正直申しますとこういう風な集まりは、今お話しがありましたように、まちづくりとか都市計画といった形で議論されるのが普通でございますが、私は率直に申しまして、このお話しがくるまで首都機能移転のことをほとんど勉強したことがありませんでした。私はにわか勉強を一所懸命致しまして、向井千秋さん風に短歌を一つ作りました。

首都機能「移して何が 変わるのか 地元の人には なかなかわからん」という句を一つ作りまして、何も知らなかった私をベースにしまして首都機能移転を初めて聞くような方にご理解いただけるように報告用レジュメを作ったつもりでございます。

首都機能移転という言葉が使われておりますがこの首都機能というのは、実は「三権一括移転」と言われ、行政府、最高裁、国会の移転であるということの一つ押さえて置かなければいけないと思えます。ということは、どういうことなのかと言いますと、東京都は「政治首都」の地位を明け渡して、「経済首都」になる。それに対して新しい都市を、それをニューキャピタルテリトリーと言うんですけれど、要するに新しい首都地域として、どこか別のところに移そうというのが基本的な考え方であるというて宜しいと思えます。

何故、そういうようなことが必要になるのかということについては、私が必然性、最も説得性の高いと思える議論は、申し上げたように国家的統治機能、要するに政治の機能の維持です。大震災が起きたり、典型的に阪神大震災ですけれども、ああいうことが起きたときでも、国家機能が麻痺しないために、そのために事前の手を打っておこうではないかということ、どうやら一番大きな要因らしいというふうに感じてこのようなタイトルをつけております。

経営学の世界では、こういうことを「リスクマネジメント」といいます。リスクに対する国家的な管理の議論です。それが受け入れる立場の栃木県の場合には、危機管理という問題ではなくなってきて、新しい首都を人工的に形成して行って、地元のいろいろな都市の機能と、有機的なネットワークをどうやって作っていくのか、そしてそれは同時にそれを受け入れていく、地域住民の様々な立場の地域住民の方にとってどういうふうなメリットがあって、或いはどういうふうな若干のコスト負担があるのかということ議論して行って、コンセンサス作りをやっていかねばいけない問題だというふうには思っております。

次に、首都機能移転は何故必要なのかと言いますと、大きく分けて、「自然災害への危機管理」と、「東京一極集中を是正」すること、それから景気がこれによって浮かび上がる、「景気浮揚効果」。もう一つは、大変抽象的なんです、「人心一新効果」、息詰まった閉塞感のあるところから抜け出したいということですが、その人心一新論というものは、首都機能移転とは直接的な結びつきはございませんし、景気浮揚のほうも、14兆円の下に書いてございますけれど、移転費用が14兆円で波及効果は25兆円、そして147万人の雇用増加になると。先程最初の十年間で雇用の効果は持続するわけでございますけれども、それほど大きな物凄く大きな経済効果ではないというふうにいって宜しいかと思えます。

「東京一極集中の是正」ということは、枕詞でよく使われるんですが、東京一極集中というのは、皆さんご承知のように非常に少ない面積のところから超多数の人口が集中していることによって、交通渋滞とか地価がべらぼうに高いとか、夏場の水不足とかあるいはゴミがたくさん出て東京都はゴミの輸出をしているわけでございますから、都内ではもうゴミの処理はできない、最後の夢の島あとにもう一つ何か作ってという話がありますけれど、それを作った後には展望がないといわれておりますから、非常にある意味でアンバランスな都市であることは間違いないですね。

ただ、東京一極集中で確かに様々な不満の理由はあるんですが、何故東京は人を惹きつけるかという

ますと、一極集中にはやはりそれだけのメリットがあるということは間違いのないと思います。教育一つをとりましても、或いは先程の文化的な教養的な消費にしましても、東京というのは実に便利なんですね。それを「集積の効果」と申しますけれども、それがありますからやはり東京一極集中がすべて悪だといえるかどうかという、これは一つ疑問符がつけられるべきだろうと、私は思っています。

次に、首都機能移転を危機管理として考えた時に国から見た効果等ですが、国家の統治機能がショートしてしまうことを二つに分け、地理的に分けることによって保護しようということでございます。時々この首都機能移転が、地方分権なんだという話がなされますが、これは別だと私思っています。というのは、経済首都と政治首都という形で二つに分けていく議論でございますから、これは地方分権とは違う。要するに、首都をもう一つ場所的に分離形成していこうということですから、これはもう一つの首都の人工的形成であって、地方分権ではないと私は思います。

もう一つは、「財政問題」が非常に大きな問題で国債の発行残高は、二十四兆円でございます。これがいまのままの支出が続くことを考えますと、十年後には倍になるというような推計がでておりますから、そういう中で十四兆円というのを国が負担することが可能なのかということやはりどこかできちんと議論がなされなければいけないと思います。

政治都市と経済都市を分けますと、企業は情報収集と処理のためのコストがかさむということも考えていかなければいけないと思います。それは、ブラジリアというものをブラジルで新首都を作ったときに、リオデジャネイロと千キロくらい離れておりますから、非常にコストがかさむんですね。

東京からみたプラスの効果としては、実は霞ヶ関その他の官庁街が移転した跡に、広い防災空間が出来ることは、極めて望ましいことだと私は思っております。それから交通混雑とか、ゴミ問題とか、水不足は、若干ではございますけれども、軽減されることは間違いはございません。

ただ、東京都としてはかつて独占していた政治首都の地位を剥奪されるわけですから、それはやはり移られる方からみたら非常に憤懣やるかたないことだということはお分かり頂けると思います。ただ新首都からみたときの効果はいっぱいあるんですが、例えば地域のイメージと地域の地位が上がることは間違いございません。それから文化水準が向上する。国際都市としての機能等を入れていきますと全体的な文化のレベルが上がることは間違いのないと。それから国際交流、大使館等をそこに持って参りますと、国際交流は当然そこで活発になります。

それから、産経新聞の1月1日の記事に首都機能移転でアンケートをとっておりますけれども、地域の方の最大の関心は「地域経済の活性化」なんですね。この地域経済の活性化というのは、実は直接的には、建設用資材、それからそこに参加する人の雇用を作り出すのですが、必ずそのような効果は、副次的な効果と呼びまして、その方たちの生活に必要な様々な商品が売れて参りますし、地元で最初十万人、最終的に六十万人の人口が張り付くわけですから生活関連の消費だけでも、非常に大きくなることは、間違いございませんので、この点は非常におおきなポイントだろうと思います。

それでは、国家的な見地からみた時には、実は安全な場所だったらどこでもいいんですが、那須地域が何故最も有力なのかという話を次にしたいと思います。まず、第一に「安全性」が非常に高いと、地震の可能性は低い点でも安全性は非常に高いということで危機管理としては、非常に場所的なマッチングが高いと思います。

それから「用地確保」が非常にしやすいということがあります。国公有地等々を合わせますと比較的まとまった土地があり、土地を少数の地主が持っているということで用地の確保がしやすいと思います。

「水資源」も非常に余裕がある。可能な取水水準の中で、33%しか利用していないというデータもございまして、大丈夫だと。「交通アクセス」で一番問題なのは空港なのですが、福島空港がかなり近い時間で使えるというところでこれも問題はないと。渡辺知事が利根川以北に持ってこなければいけないと、話されているのは、国家的な危機管理と同時に経済効果を考えた時に、やはりこちらに持ってくる

べきだというご意見だと思えます。

最終的に県とか、或いは皆さんのような行政マンの方たち、或いはその関連団体の方たちが考えなければいけないことは、実はもってきた時に確かに県にとっては大きな財産になると、それと同時にですね、県の全体の効果は上がるんだけど、いいことだけが起るわけではございませんので、環境破壊の心配もあると、本当に水は大丈夫なのかと、ゴミ問題に対してどうするんだと、交通問題をどうするんだとか、いろんな問題点がございまして、実は、そこにおられる「地域住民」の方々、正確にいきますと、農業、工業、商業に携わっておられるの方々に対してどのような「メリット」が現実にあるのかという話をしていくこと、或いはなんらかのデメリットがあるとすれば、「デメリット」を少なくするための施策というものを、県は、或いは自治体はどういうふうに考えているのかということが、もう少し、はっきりと示さなければいけないと思っております。

筑波研究学園都市の事例でもそうですけれども、東京の業者さんがくると地元はみんな駆逐されてしまう。そういうふうな事例もございまして、或いは、地元の商店街とか、小さな所にですね、大きなショッピングセンターがきますと、そこで客を取られてしまうということも起こりうるわけでございますので、心配される方たちの「不安を取り除く」というか、自衛策というものを同時に提供されたほうがよしいんではないかと私は思っております。

最後に、今日ここ小山でセミナーをやっておりますので、「県南地域」にどういうメリットとデメリットがあるんだという話は、実はこれは大変難しい議論でございまして最初に藤本先生から温度差があるというお話がございましたけれど、アンケート調査でも、県南地区は関係ないよというふうな回答が多いわけがございまして、そうではないということをお話しておきたいと思えます。

当然メリットとデメリットがございまして、デメリットは、「ストロー効果」というのですが、強い都市が両極端にありますと、間の通過地点になる都市からは消費その他が両端に吸い寄せられてしまうということを私たちは申します。ですから、ちょうど通過地点が小山と宇都宮になりますので、通過地同士の競争は当然激化していかざるをえないだろうと、いうふうに考えて宜しいわけです。ただメリットとして交通量とか、その他が圧倒的に増えることは間違いございません。

それからもう一つは、東京、那須の中間地点にございまして、「ベットタウン」として発展していくことは、中長期的には可能であろうというふうに思っております。ただ黙って座っていただけではおそらく何も得られないから、小山の工業者、商業者の方は何らかの自助努力をして、打って出ていくことが必要かも知れません。

もう一つ、直接関係はないという議論なんですが、那須に新首都が来るというのは実は地元の「県民の誇り」になりうるんだということをお考えいただけたらと思っております。

まちづくりとか、その他ではなくてお金とかメリットのお話ばかりして恐縮ではありますけれども、経営学をやっていると、大体こういうお話になりますので「コンセンサス」をうまくとっていくことに、県の方々にはこれからは心砕いていただけたらなと思っております。以上でございます。

藤本：

ありがとうございました。最初に申し上げた論点のいわゆる総合的な部分、それから、二つ目に県南の地域の関わり方、主にこの二つの論点を柳川先生からお話をいただきました。次に福澤先生でございますけれども、この論点でいきますと三つ申し上げましたが、この三つすべてに関わってですね、新首都への提案を考える。サブテーマといいますか、消極的賛成の立場からというふうにわざわざ明記してございます。都市計画がご専門で、厳しい見方をされているかと思えますけれども、この辺をご披露いただきたいと思います。宜しくお願いします。

福澤(パネリスト):

福澤でございます。私は、実は今日の席にお招きいただきまして、大変困惑をしました。正直いいまして新首都の意義はよくわかるし、その意味では何故賛成かということに関しては相当程度、その通りだと思っているわけですが、何故消極的かということについてだけ、今日は4人の中で一人だけお話をさせていただくことに或いは、意味があるのかなというふうに考えて皆さんにお話したいと思いました。

といえますのも、或る時期に勉強させてもらった筑波学園都市とのかかわりの中で新首都の建設はやや大変だということを思っています。その辺にこれから皆さんが考えていなければいけないことがあるのかなという意味で、消極的ということをあえて申し上げたということです。

我々一人一人は市民であったり、県民であったり、国民であったりするわけで、賛成の方についても第一義的には国民でありますから、新首都の移転の必要性に関する国民政治学的な意義をもう少し詰める必要があると思っておりますが、実際には、国土庁という事務局があることによってでしょうけれど、あまりその社会科学的、国民政治学的な視点というものは、あえてだれも火中の栗を拾わないと、勿論私も都市計画家ですから、拾うつもりはないわけですし、けどどうもそこがないことが、県の中で皆さんの中にも、温度差があるように、日本の国民の中にも、温度差がもっと強くあるということはこれから非常に大きな課題であろうというふうに実は思っております。

その次にですね、新首都というのは結局何かというと、中央政府機能をスリム化するきっかけとして考えられている。まあ、当面火急の議論としては、先程の危機管理論が非常に強く四全総、五全総という格好で国のレベルででている。

それは、規制緩和であったり地方分権だったりしますけれども、とにかく東京の今の中央政府がそのまま移転してくる意識は全くない、あるべきではないという観点が非常に必要だなというふうに思っております。

それとそういう中央政府のありかたというのは、成長性はない、むしろスリム化するというこの意味というのは国民としては追求するわけですから、非常にクールな形で中央政府のあり方をこの際見直せるということが、那須の自然環境、受け入れる環境との間で、いいイメージを作っていけるのかなというふうに私は思っています。

結局地元地域にとって何かといえますと、新首都に関連する都市機能を育成していかないと、実は都市として成長は誘導できない。一応10万人とか、60万人とか、ある程度のガイドラインがあるのですが、かなり掴みの話であってそれを実際どう埋めていくかについては、「筑波研究学園都市」と比べると見えていないのではないという感じです。

いくつか刺激的なものを申し上げますが、例えば観光対象としての国会とは何だ、それから「政治」というものは一種の「文化」だろうというふうに考えたときには何ができるのだろうかということが大事だと。

日本の政治とか政府が、国際関係の中でのプレゼンスを高めていく、イニシアチブを取っていくというような議論が本当に出来るのか、金だけ出すという形の中央政府だけではとても都市がもたないという感じを持たざるを得ない。やはり、ワシントンでちょくちょくいわれているように、ロビイングとか政治外交分野に絞ったシンクタンクとか、コンサルタントというような機能やその集積を図れるのかというようなことは、むしろ地域として求めていかないと上手くいかないのではないかという感じがします。言わば政治家のための、高等学院みたいなものが必要でしょう。これは、今迄の官僚のための法学部ということとある意味では対照的なイメージを打ち出す必要があるのではないかということが一つの論点です。

それから新首都に絞って言いますと、移転新住民の生活像というものがかなり大事ではないかと思ひ

ます。それは三権の中核的な部分の受け皿であると考え、その人たちの生活像はかなり特異なものがありそうな気がするわけです。そういう人たちが地域との関わりの中で何を楽しんでくれるのかということが大事だろうというふうに思います。

かといって楽しんでもらうために一所懸命サービスしなければいけないということもないわけでありまして、その辺がお互いの関係ですね、来ていただく立場と、それから来る人との関係をもう少しお互いが理解し合う必要があるということでもあります。地域社会との関係を果たしてどんなふうに組み立てていけるのか、「筑波」の失敗はその人たちに国家公務員住宅団地を作ったことです。国家公務員住宅を作ったものですから、要するにその人たちは家賃を払わないわけではないんですけど、ごく限られた形での支払いをしているわけで、地域社会を作るのには非常に苦労して、実はばたばたした。赤提灯が最初にともるまでに時間がかかった。そういったものができてはじめて、それに対応していれば波及して民間の活力といったものが、どんどん増えていくという期待が持たれます。筑波は上手くいっているように見えますが、最初は公的なものだけだったのです。それは、簡単に言うと固定資産税が入らなかったんです。それじゃまずい、とてもやってられないわけです。で、その公的な研究・教育に対して科学技術博みたいのをやりながら、実は民間の同じ技術開発の部門を誘導する努力を、これは公団がデベロッパーとしてむしろ主導したきらいがありますが、それによってようやく、科学技術都市、教育研究都市を引き受けた地域にとって始めて、都市の成熟というか育成という過程を踏むことができたわけです。

その辺が、国会都市をいわば引き金にしなごらその周りで国際文化とか、国際芸術とか、生活文化とかいう議論の中に、いかに、その実質上の育成のプロセスを組み込んでいけるのかなというのが、次に問われている那須新都市の大きな課題とか、ストーリー作りの課題になっているというような感じています。

とはいっても、新首都機能に関わる形での関連する都市機能とか、人口というのは、質の高い物を求めることは確かだろうと思います。そのことを地域の人作り出していく場合もあれば、付随して移ってきてそれを地域の人たちがいわば享受するという意味の生活面での開発効果もありましょうが、受け入れ効果というのは期待するというよりは、強く求める必要があると思います。それは情報とか、医療とか、或いは小中等教育レベルくらいから始まる議論じゃないかなと思っています。

それから今日のテーマで持続・共生・創造という那須新首都についてのテーマについての議論ですが、逆にいうと栃木の県内どこの地域であっても、自分の都市をなんとかしようと思う人は、同じような思いを持って圏域いずれでもそういう風に考えているわけだから、それをとやかくいうことではない。ただ、今回の場合はいわば国会都市を核にしなごら、その中小の都市群としてやっていこうではないか、クラスター型のいわば都市開発を那須は引き受けますという言い方をしたことは、非常に大事なことでしょうし、それが新首都の移転すべきということに対する一つのいわば、回答になっている。

例えばその安全性とか、一種の危機管理に対応する議論もそういう開発の形ですね。大きな都市をポンと作ります、どこかの新興国のように新首都を大きな形でポンと作ってしまうようなことを避けようと、少なくとも那須は避けたいというふうに聞くことが出来るし、国もそういう風に求めているということに対する答えになっているのかなというふうに思うわけです。既存の都市のリノベーションと関連づけて、都市的な整備区をちりばめるといふ、手元にもあるようですが、パンフレットの一番の、地域の都市的な整備に関わるのところでは、それがやはりポイントになっている。それは我々常に都市整備を考える時に一番問われることですよ。住宅団地を作ります、工業団地を作りますといっても、今迄の市街地或いは、居住環境との関わりの中でそれが意味を持たなければ、単に開発誘導でしかありません。既存都市のリノベーションとのかかわりの中で、都市的な整備区を、いくつかの特性に即して作っていきたいという提案を、新首都をきっかけにしているかも知れませんが、これから持続的な栃木県がある

ための基本的ないわば都市整備のセオリーだというふうに考えていいのかなということがあります。

さっと全部を全面的にやれるわけではありませんから、おのずからクラスター型になってしまう側面もありますが、それを前向きに続けることというのがこの際の大事なところというふうに思っております。

一番大事なことは受け皿としての地域が、新規開発に対する、地形条件がよいというだけではなくて、もうちょっと違う面がありまして、開発に関わる土地条件というのは、ソフト的なこと、規制に対する対応、或いは変に乱開発にならない仕組みといったことが十分に用意されているということが問われるところだと思います。

そういう意味では、今の適地選定に向けてあと半年くらいというやり方と、受け皿になる地域でのそういう土地の規制開発条件のあり方が地形ではなくて、それ以外の土地の条件のあり方が、果たして何かが明確でないというのは、やや手順が逆になっているのかなという心配を、これは間違っていれば結構なんです、栃木県北のことはあまりよく知らないで失礼なことしているかもしれませんが、そこが一番気になるところだというふうに思っています。

そういう意味では、計画的な開発に伴う土地利用の整序と、或いは土地利用の規制等に対する対応というものが、先取りして果たしてやれるような状況を地元地域で作っていかれるかどうかというのが、課題かなというふうに思っている次第です。

とはいいまして、実際になるというと、やはり国会は国会都市、或いはクラスター状になるというといくつかのポイントの間をつなぐ部分、新しい都市機能、都市交通機関を含めて、そういうインフラ的な部分に対しては、公的な対応をされると思うのですが、それ以外の生活支援とか、住宅の問題とか、地域文化とか交流とか、或いは商業サービスといったような部分については、やってもらうという感覚よりは、本来新首都が出来上がっていくために必要な都市機能整備の充実を、地域主導の、或いは民間主導の、変な地価の上昇で開発効果を吸収する手法は避けて、イギリスの例やなんかのよく取り上げられていますPFIといった恐らくああいう形にならざるを得ない。そういう公共事業の手法というのが、これからの県北をモデルとして進めるためのイニシアチブを地域の方々が、特に行政の立場はそういうことがおわかりになる立場ですが、進めていかれるということが望ましい、期待したいというのが、私のまとめとしてのお話です。以上です。どうもありがとうございました。

藤本：

ありがとうございました。いろんな課題をいただきました。なかでも筑波の教訓に基づいた、新しい地域社会の創造という中で生活像をどう描いてゆくの、或いは既存都市のリノベーションと結び付けてこの都市整備を進めていくことの必要性、或いはクラスター開発、或いはこのサブテーマの適切性といったようなことについてお話をいただきました。最後になりますけれども、今度は露木先生に、文化の観点からお話をいただきます。国会等移転審議会においても堺屋太一氏は、かなりこの文化の問題に言及しておられます。また、冒頭に申し上げましたように新首都作りの理念の一つには、この文化が入っております。県のサブテーマ持続、共生、創造この中では、文化のキーワードというのは創造という中に一応位置づけられているんですが、露木先生の位置づけでは、継承、共生、創造というですね、サブテーマ全体を通じる中でこの文化のことを重視していかなければいけないといったお話、一つ宜しくお願い致します。

露木(パネリスト)：

地域文化とか、生活像っていうものは、どういう風に見たら具体的になるか、その事例として文化財を使って進めていきたいと思えます。

新都市を作るということは百年後或いは、千年後はまさしくそれは文化財になるわけです。ですから

今私たちの手に、継承されて受け継がれ、伝承されている文化を創ってきた当時の人たちと同じ状態に私たちはあるという風に捉えることが出来ると思います。そのような観点から見ていきたいと思います。

資料1・2の文化財の説明になりますが、今回の新都市の場合ですと自然環境を利用するということは、その保護・保全、同時に文化財をどのように守るかが問題なわけです。それでは、文化財はどのようなものかといったときに、建造物や絵画、彫刻などの有形のものは、文化財として捉えやすいのですが、無形のものはなかなか捉えにくく、動植物も文化財なのですが、見落としがちなもの。そして、どんどん新しい文化が発達していく中で、伝統文化は軽んじられて失われてきました。残念ながら、失われなければなかなか制度的に守る姿勢はでてこないわけです。伝統的な物などが失われすぎましたので、そのために明治三十年、1897年に文化財指定制度、古社寺保存法が制定されました。ですから百年ですね。それから文化財保護法制定から来年で五十年です。そういうことによって文化を守っていきこうという形になっているわけです。

そしてこれからの二十一世紀というのは、私たちには環境問題というものと、人口問題というこの二つを考えなければいけない状況にあるわけです。そうしますと、今度つくる、新都市っていうのは決して東京のモノマネではないと思います。ですから、イメージするときに東京の消費文化とか、ゴミ文化、無秩序的なものをもちこまない。それから環境劣化というものがあるわけですから、そのことをよく考える。新たに私たちはエポックメイキングをするんだって。そうすると今迄そういう視点で都市っていうのは、作られてないことがわかってくると思います。

事例がないといってもいいと思います。環境問題・人口問題を見据えて創っていくということ、ですからどこにつくるということも問題ですけれども、それをどういう風に県民、市民、国民、全部で創っていくのか。世界的に見て新たに、すばらしい新首都を、二十一世紀の新都市を創る。私はそのくらいの気概で、これを考える機会が一人一人に与えられているから、そういう点ではいいことだと思います。

そして、その場合に、どういう風に文化財を生かしてゆくか。自然環境も動植物も含めた記念物、あるいは民族芸能などの文化財は私たちにとって凄い財産なわけです。これから作っていくのも財産になるわけですが、今ある財産を生かすかということ。何が財産であるかがわからないと使いようがない。ですからある意味では宝をもっていながら忘れていたり、その価値に気がついていないものがたくさんあると思います。

私は、三人の先生方とは違って、ちょっと栃木県はこれだけの財産持ちなんですよということ。その財産をどう生かしていくか。そしてそれが那須の地域であっても、それは県全体で支えている。それからそれは日本の気候・風土によってつくられた独特の文化である。ですから世界の人たちが憧れるわけですね。自分たちは見なれているので憧れていないんですが、日本の独創的文化は、西欧に大変影響を与えているわけです。

文化財っていうのもいろいろここに、碓氷峠の鉄道施設とか、みいけ炭坑というのもこれはもう近代化文化遺産として、認められています。これからの新都市っていうのも、どういう文化財を創っていくのかにかかっているかだと思います。

栃木県の自然公園と自然環境保全地域図の上に、資料3のように、国宝と重要文化財を載せました。そうしますと、私たちは、その自然公園環境保全の地域と、同時に文化財が重層的に見えてきますし、具体的によりはっきりしてくると思います。とかく日光の二社一寺に目が向けられますが、他にも笠石神社の那須の国造の碑とか、それから足利の書籍関係ですね。こういうところにも非常に国宝のしっかりしたものが押さえられているという点で宇都宮市だけでは成り立っているのではなくて、うまい具合に三地域でもやはりフォローしていることがうかがえると思います。

それから重要無形文化財ですけども、これは益子とか、佐野市ですね、佐野市ですと、天明釜という大変有名な、茶之湯釜の蘆屋釜と並び賞される素晴らしい鎌倉時代からの釜がございまして、それに

よって地場産業が盛んであったということですね。ですからそういう産業とも関わっている一面をみる
ことができると思います。

それから、資料4のように、今年12月に日光の二社一寺が世界遺産登録の可否が問われる予定です。
すでに自然遺産2件、文化遺産7件が登録されています。いろいろな時代の財産を現在まで支えている
わけです。自然環境や人工的環境を守るということになってきます。次の資料5は、国指定文化財、記
念物、史跡、名勝、天然記念物についてです。これは県の県営の公園の配置図の上に乘せて両方重ねて
きますと、私たちの中で時間的空間っていうんですか、現在の空間と歴史的空間がつながり、より深く
なって広がってくると思います。

ですから、こういう財産をどのように、今後都市化、新都市を作るときに踏まえていくかっていうこ
とですね。自然環境は当然守るんですけどもそういう目に見えるものと、見えないものをどれくらい
大切に利用するか、一人一人がどれくらいそれらを意識していくかが課題になっていると考えます。

資料6のように、文化財を自然と人と共生からみます。新都市を創る時の県のサブテーマは、持続・
創造・共生です。共生っていうときには、人と動物と自然とか或いは、自然と天然自然ですね、それから
人の手の加わった自然、それと人工というものがどういう風に調和して、バランスを持って共生してい
くか。新都市の文化を創ってゆくか。そういう捉え方が出来ると思います。

栃木県でしたら、農山村を基盤にもつ伝統的な工芸産業というものが資料6のようにたくさん考えら
れます。天然の自然と人間の共生を考えながら自然の中の物、天然素材を五十年くらい前までは非常に
利用して、そして自然環境自体も材料生産の中で再生されていたってということがいえると思います。

ところが化石燃料の石炭石油製品で私たちの日常生活道具がまかなわれるようになってからは一変し
てしまっているわけです。自然と人間との共生関係をもう一度改めて、見直していく視点が大切ではな
いかと思います。

それは、地域の気候とか、地形とか自然条件ですね、国土を生かして地域が育んできた土とか、水と
か、風とか動植物、それを人類の知恵と工夫で、そして創造性、独創性、造形美のあるものを作ってきた
っていうふうにかんがえられると思います。

天然自然と、人間の手が加わった自然と人工との調和均衡っていうことです。那須の自然ですと、そ
の自然の上に人工物を造る経済効果がどうのこうのって言って、造ったらほっといて、どんどん造っ
ちゃうのではなくて、つくると同時に使った部分は修理復元し、そして創意工夫してまた創りつづける。
人間が生活するわけですから、人工物が増え自然は減ってきますよね、そうするとまた回復再生して、
次の世代に伝えていく。ですから私たちが、ヨーロッパは美しい都市と感じるのは、なにかという
造ったら、はいそれまでではなくて、常に修理、修復して保護している。ただそれは、表にあまり見えて
ないんですけども、決して石の建築でも、大切に修理修復しております。しかし、東京は使用可能な
モノまで建てかえ、資源浪費、使い捨て文化を築いています。永々と維持をして、そして我々に受け継
がせてくれた文化財をこの五十年、百年の間に我々はこわし、使い切ろうとしているのです。これから
の私たちが新都市をつくるときには、いろいろな参加のしかたがあるわけですから、市民一人一人が関
心を持ち、積極的に参加して、その行方をしっかり見守ることが大切だと思います。新都市というもの
は、人間が住むことがまず前提ですから、人間が住めば自然のどこかがぶち壊れるのは当然ですけれど
も、最小限に止め、そしたらそれをどう復元するか、その覚悟をして、それを受けて今後百年、二百年
後に栃木県にあるのは、非常に素晴らしい新都市で文化財に登録したいくらいだって。世界の人たちも
日本の文化として期待していると思います。

ですから、どのようにして継承された文化財を次世代へ伝承し発展させるか。単なる復古主義とか、
復帰とか、懐古趣味ではなく、いかにして美しい都市環境を造っていくか。人口問題、地球環境問題な
どを踏まえた上でどういう新都市が可能かっていうことを問われていると思います。

藤本：

ありがとうございました。文化財の考え方、それから栃木県内でも見落とされている文化財っていうのは沢山あるんだということ、首都形成の際には動植物を含めた自然と文化、それをいうなれば創造的に継承していくことが大切であるというお話だったと思います。

ご発言一巡しました。これから十分程休憩に入りたいと思いますが、皆様方には、最初に申し上げました意見表をそれにご意見、ご質問ありましたらご記入いただきまして、受付まで提出をお願いいたします。後半の議論の中で活用させていただきたいという風に考えております。それでは3時に再開を予定させていただきます。

《 休 憩 》

藤本：

お待たせしました。

それでは、これからセミナーの後半に入りたいと思います。会場の方からご意見をということをお願いをしたんですが、だいぶ皆さん遠慮なされているようでお二人からしかご意見ご質問がございませんでした。

まずは質問に沿って先生方からご発言をいただいて、そのあとフリーディスカッションの形をとらせていただきたいと思います。まず福澤先生に対するご意見でございますが、この移転新住民の生活像の検討が必要であるということに関してこの新首都の、地付きの住民、新住民との関係ですね、これがライフスタイルや行動パターンにどう現れてくるのだろうか、これ大変重要なテーマになるはずであるというご意見ご質問でございます。

もう一つは根岸先生へということ、この新首都が那須地域であるということ、場合ですね、中々この具体的なイメージをつかめない。これについてはどうかというようなことでございます。じゃまず福澤先生の方から宜しく申し上げます。

福澤：

私が先程お話ししたことは、今がいわば誘致する段階という立場に立ってみれば、新首都が来ることを前提に新住民の性格を心配するというのも、あるいは早すぎるのかもしれない。早すぎるのかもしれませんが、来て欲しいわけだし、来ることを期待しているわけですからそのあとの覚悟はしておく必要があるということです。

その後の覚悟は恐らく二つありまして、一つは今ご意見いただいたその地域住民と新住民との関わりという生活のぶつかりであるし、人間性のぶつかりでもあるし、文化のぶつかりでもあるという点です。もう一つは、地域の運営系に関する心配という風に思っています。それは、財政とか、行政とかそういうことです。まあ後段のことは、話は来ると決まってから考え始めるしかないわけです。前段のことは、つまり新首都を誘致することの意義に深く関わっているからフロアーからいただいたご意見は私は非常に貴重だと思っています。

先程ご説明しました時に、私はどちらかというとな住民はけしからんというような気持ちでお話をしました。「新住民は勝手だ」と、つまり誘致してもらっているものですから、来てやったぞということになりかねない心配を私はしているわけですね。それは半分正しいという風に思っています。つまり、筑波研究学園都市の場合はですね、新住民の特に研究者、学生、開発技術者達は、熱心に、夜昼かまわずやってるわけですよ、ところが中央政府機能を構成する人たちの生活のあり方っていうのは、本来はそうではないはずですよ。やっぱり九時から六時ですむはず。そういう人たちが職務上は恐らく非常にクール、冷たい感じがある。それを越えてどうなじむか、どう地域と関って下さるのかなという、

請求書をまわしたくなるような気持ちを、私は栃木県の立場として思っているわけですね、そんなことが前段です。

後段はそれに対して、人間性のぶつかりであり生活像のぶつかりであり文化のぶつかりだという風に考えると、これは非常に学ぶことも、与え合うことがあるというふうに考えればいいのかと思います。地域の人たちは、当然受け入れることはあるわけですが、受け入れる中でもそのあまりにもその都市的な環境とか、都市的な情報の型の生活像を受け入れる必要は、無いわけでありまして、やっぱり、那須なら那須が持っている自然環境、地域環境、歴史風土であるというものに対するその評価を求める必要もあるだろうというふうに思います。

それからライフスタイルみたいなことも考えた時に、やっぱり人工的な空間の中にこの閉じ込められる感じから、全人格的なそのあり方をもって国家公務員としての職務を全うしてほしいという感じがあります。それはいわば本人ですね。もう一つは、子供さんとか、主婦とかという人たちがもっとそのお父さん、主人以上に地域を享受し、地域に対して働きかければよい。そこで、まあどこでもそうですが、子供の付き合いがコミュニティを最初に創り始め、その次にお母さんたちは子供につられて、方言を覚え、標準語を覚えというふうに動いていくわけですね。その辺の時に丁度いい感じで生活っていうのが対等の関係でお互いのやりとりができる、そういうプロセスを、地域の環境をつくっていく必要がある。地域の環境というのは地域の行政とか具体的な環境がそういうものがつくっていくのかなとそんなことを私は考えています。以上です。

藤本：

移転審議会のなかで調査地域のヒアリングのなかで中央地域のなかの特にその三重、畿央地域ですね、ここはまさに古代からの大変濃密な、その文化の蓄積があるというようなことで、異文化とその拒否反応というのは大変大きいんじゃないかというような、意見もでていらっしゃるようでございます。で、振り返って、我が那須野ヶ原地域は一体どうなのかというようなことで、根岸先生ご意見がございましたらよろしくをお願いします。

根岸：

直接の答えにはならないと思いますが、私の経験から申しますと栃木県庁に中央からおいでになった方が栃木県でお辞めになりますと、宇都宮に住まわれるわけですが、全国各地を回ってきて最後に宇都宮に住まれた方が一様におっしゃるのは、「宇都宮の方って非常に心が広いなあ。外から来た人をよそ者として扱わないし、すぐに仲間の中に入れて一緒に生活して生きていける、非常に心が広くすぐに受け入れてくれる。」ということ、これは、掛け値なくいっているわけですね。

栃木県民を考えてみますと、やはり同じような傾向ではなからうかと思えます。他の方を素直に受け入れて、一緒に生活するという県民性があるのではないかと思います。したがって、那須にいろいろな方がおいでになっても、やはり同じことが言えるのではないかと思います。特に那須は、明治の元勲を始め、いろいろな方が新しく入ってきたわけです。しかしながら、在来の方と一緒にあって農場を造ったり、そこで立派な文化を作って共同生活をしておられます。

私は、それほど心配はないんじゃないかというふうに思っております。ただちょっと心配なのは、新しくおいでになった方も那須地域に定着をしてくれる方であればそう問題ないと思うんです。やはり公務員が多いですから、ある程度年限が決まっています、また次のところに転勤していったり、折角仲良くなったのに去ってってしまうというようなこともあるかと思えますので、その辺がちょっと問題かなと思っています。以上でございます。

藤本：

露木先生の文化論の視点からいかがでしょうか。

露木：

はい、国家公務員の職務時間はともかくとして、今わりと若い人たちは、アフターファイブというのをかなり大切にしているわけですね。ですから、そういう新しい生活スタイルというのも考慮に入れていきますと、心配ないんじゃないかなっていう考え方も出来ると思います。

ですから、5時以降に今迄は企業戦士なり、或いは職務の方で忙しかった方々が、これからの21世紀はいままでとは違ったライフスタイルを作っていくわけですから、そう、いろいろ心配しないで、どう文化をこれから享受していくか、自分たちもまた文化を創っていくか。そうすると、那須にある文化財の楽しみ方があるわけです。定着しなくても私かまわないと思うんですね。定着しないでどっかにいらした方が、栃木の素晴らしい文化を、そしてまた次にいった任地でまた素晴らしい文化を享受してって人間として成長するんだっていい。

これからは、ライフスタイルが、もっとどんどんアフターファイブをいかに使っていくかって、子供と女性だけが文化を楽しむんじゃなく。男性の方も非常に楽しんでらっしゃるかた、最近すごく増えていると思います。

藤本：

他の先生方いかがですか。

柳川：

私は、経営学でございますので街づくりのことについては全く素人なんですが実は共生ということは企業の世界でもここ十年程言われておりますが、私は実は共生は昔からあったと思います。自分の結婚生活を考えた時これまさに「文化の衝突」そのものでございました。味噌汁の味一つとりましてもだいぶ違うというのが現実であったと思っています。それが、いつのまにかですねお互いが融合しあって、あるところに落ち着いていくのだというふうに思っております。

今はご承知のようにテレビがあれだけ発達しておりますと、文化の差っていうのは、私はかつてとくらべるとそれほど大きくは無くなってきているという気がするんです。で、その他者が対する許容度の問題なんですが、今、根岸先生からお話がありましたように非常に高いということですからそんなに心配をする必要はないのではないかと。

また、実は、先程新住民と、旧住民が接触するときには私は筑波の例ではファッションの面でも、それから教育の面でも新住民がある種の新しいライフスタイルを持ち込んでいってそれが少しずつ定着したという風に聞いております。そういうふうな形で、文化が結びあって溶け合っていくことは大変好ましいことではないかと私は個人的に思っております。ですから、絶対嫌だという拒否範囲がそれほどいなければ、これは時間が解決してくれるんじゃないかと私は思っております。以上です。

藤本：

もう一つですね、この新首都、とくにこの那須地域についてその具体的なイメージがどうもつかめないというお話ですね。これは、もう誰しもがそう思っておられるのではないかと考えていますが、資料の中にも絵が沢山描かれているんですけども、どうもなんかこうよそ事のような感じがして中々こう自分自身が関っていきそうな、こう感じがしないということじゃないかというふうに思うんですが、根岸先生へということでご意見いただきましたので、何かございましたらお願いします。

根 岸 :

なかなか難しいご質問ですね。というのは、これから地球問題とか自然環境との共生とかが大きなテーマとなってくる中で新しい首都となれば、今の東京のような姿ではないと思うんですね。ところが文献ではキャンベラとかボンとかを読んではいますけれどいったことがない、いったことが無いとイメージとして中々浮かばないわけです。

新しく来るであろうこの新首都をこんなふうにつくったらどうかというのが資料にはありますが、まずお願いしたいのは、どんなまちをつくったらいいのかというのは、人に聞いてそれを考えるのではなくて、いろいろと資料をお読みになったら自分自ら手を下してイメージを書いてみるということがまず大前提であろうと思います。

都市の機能いろんな機能がありますね、それを新しく出来る都市で全部しょったら、かなり大きな都市でないとしょいきれないと思います。しかしながら、那須野ヶ原にくるということであれば、その特性を生かし、新しい首都でなければ背負えない首都機能は当然新しいところへつくってもらわなくてはなりません。国会とか、行政や司法の施設とか、或いは各国の大使館や外交・国際交流施設等の首都でなければならぬというものは、そこに作る以外にはないだろうと思います。

しかしながら、それ以外の地域文化交流区であるとか、連合都市としての生活拠点都市区であるとかの機能は、何も都市でなくても、黒磯だって引き受けられるし、大田原だってOKでしょうし、矢板でもいいわけですね。従って、それぞれの機能を関係の3市2町でよく話し合い、この機能は私のところへというふうに手を挙げながら、新しい首都に貼り付けるものと、周辺都市でしょえるものを皆で相談しあいながら決めることにより、1つのイメージをつくられると思います。それで納得がいったら、今度はお互いに今度協力をしてやっていく、それがこれから進むべき道ではないかと考えています。

藤 本 :

はい、それでは、ご質問についてはこの程度にさせていただきます、もう1つ先に進みたいというふうに思います。

もう少しこの地域に引き付けてこの新首都の問題を考えてみようということでございます。今日のサブテーマは、持続的発展というようなことなんですが、既存都市のリノベーション、それと結び付けて結成日というのは考えていくべきものであるということと強く関連する訳ですね。県南地域の街づくりの課題、これが新首都との関係課題というふうに見ていくこの街づくりの課題を考えていく必要は当然ある訳なので特にこの持続という課題、サブテーマを考えてみれば、あるべき新首都論だけではなくて、やはり足利とか、佐野とか、小山とか、その県南の諸都市が現在かかえている街作りの課題、これを、新首都を視野に入れ持続的にそういうことを考えていかなければ、21世紀の都市像というものは、的確に描けないということがあるかと思えます。

そこで、三人の先生方は県南地域において教育研究に携わってきておられるそのようなお立場も合わせてですね、もう少し、県南地域の街づくりの課題というようなこと、あるいは、栃木県全体における県南地域の街作りの位置づけというようなことでも結構でございますけれども、その辺をお一人お一人ちょっとお話を頂きたいということ、それから、露木先生は今日のメモにはございませんけれども、まさにその芸術文化というようなことでは勿論ご専門でございますが、街づくりという観点からすればですね、単にその芸術文化における街作りというようなことより、もっと枠を広げて保健、医療、福祉ということと、その芸術というものを結び付けてこの町作りを考えていくというようなそういうところで、まだまだレアケースというというようなことですが、そういう意味ではユニークな社会的活動もなさっておられますので露木先生にはその辺のお話もご披露いただきたいというふうに思います。それではまず、またこちらから順ということで、恐縮ですが、根岸先生宜しく申し上げます。

根 岸 :

まず1つは、よく外国に行きますと「あなたはどこからきましたか?」「宇都宮から来ました」「宇都宮ってというのは何県ですか」とこう聞かれます。「栃木県」全然、反応ゼロですよ。で、「日光から来ました」と言うと、ニコッと笑って「Oh!日光」とこうなるわけですね。どうも栃木県の宇都宮というと訴える力が弱いですね。だけど、これからは、日本の首都から来たとなるとだいぶ違うんじゃないかなということですね。まず、首都のある県というので、少なくとも県民は今よりはずっとプライドをもって来るんじゃないかと思います。

それからもう一つですね、県南に住んでおりますと宇都宮の方には眼が向きませんよね。東京が主ですよ。したがって東京への道というのは比較的、整備されていますね。しかしながら、県庁所在地の宇都宮であるとか、あるいは県北とか、または前橋、新潟方面とか、あるいは茨城県であるに向かう連携軸については非常に弱いですよ。したがって、折角那須に首都がくるわけですし、国も、国土軸、連携軸というのは整備すると言っておりますし、まして、これからは交流の時代ですので、それらは大いに活用する必要があると思いますね。ただ、いいですか、国土軸、連携軸はできたけれども通過地点に過ぎないという情けない存在にはならないことが必要でしょう。では、そのためにどうするかということになりますと、やっぱり自助努力によって、多くの人々を呼び込むことをやれば、これはかえって通過交通がプラスに転ずることになると考えております。それからもう一つ、北関東横断自動車道は、採算ベースにのるのは難しく産業交通量だけでは赤字になると思います。生活道路の一環としてもこれが有効に利用できるよう、それぞれの都市の効果的な開発により、豊かな経済力や人を惹きつける力が集積した活力あるまちをこれからも是非おつくりいただきたいと思います。

柳 川 :

ちょっと、支離滅裂になるかもわかりませんが、思いついたことを申し上げてみたいと思います。

「連合都市」という考え方なんですが、実は経営学の中に「ネットワーク組織」という考え方があります。で、その新首都がある種コンパクトな形で来た時に、先程でたような地域の近くの所だけが分担し合うのではなくて、栃木県のさまざまな小山も宇都宮も、向うにはないような都市機能をそれぞれが出し合ってそれぞれネットワークを作って結びついて共生していくということが、一つ可能ではないか。その時に、どういうふうな機能の分担をするのかというデザインは誰かがしなければいけないので、今回の首都機能移転も「コンセンサス」を一方で求めながら、誰かが「強烈なリーダーシップ」でまとめませんと、なかなか話はまとまらないだろうと思います。

で、3つめですが今その各都市の自助努力というお話ができましたけれども実はそのそれぞれの街が、それぞれの魅力を持つこと、その会社・地域にしかないような独自能力を持ちますとそれは、要するに環境にうまく適応ができるということです。ですから、「途中で降りてみたい」と思わせるようなものをやはり各都市がですね、知恵を集めて創り出すということが必要ではないかと思います。そうしませんと通過地点となってしまうんですね。知恵を集めて街おこしを少しずつやって全体が、潤っていく「集団勝利ゲーム」という、参加者が全員メリットがあるようなゲームを集団勝利ゲームというんですが、この新首都をもってることが栃木県内のいろんな市町村にとってすべてにメリットがいくような形で誰かがそのトータルなデザインを示していくことが必要ではないかと考えております。以上です。

藤 本 :

あの、柳川先生、そのネットワークということで例えばラーメンのお話をされましたけれども、小山はこの国際通信センターをもっておられるとまさに危機管理という点からすればですね、国際通信の8割方バックアップ機能を有するというのです、ですから何も那須野が原でなくてもネットワークサービスということ考えた時にやっぱり県南だって、何て言いますか、蚊帳の外ではないということがあ

と思うのですね。

ですから、いろんなサービスとか何かがある種の分担されるといいますか、分け持たされていくという形で地域的な共生は私も可能だと思っております。それを目指すべきだと思いますね。

福澤：

今の二つ目の課題というのは実は困りました。なぜ困ったかと言いますと、ネットワークを強調するのですね、今回の議論でも例えば北東地域4県がからんでいるというのだからネットワークの形成は有りうるっていう感じを思わざるを得ない時がありますね。つまり宮城も福島も茨城も栃木もあるじゃないかと、こういう感覚のネットワークの、つまりそれもクラスターだということが成り立たない訳ではないんですよ。

先程のお話の中で新首都那須という提案に対して私がこだわったのは結局この既存都市のリノベーションと絡めて、クラスター開発をするという栃木県地域のアイデアは県域全部にいきわたる議論ではないかという言い方をさせてもらったと思います。今、私が直接こだわっているのは、佐野とか、足利とか、ちょっと一時期小山とかについて関わっていて思うこと、いかにも県南諸都市は拡大しすぎて拡大する方向でやってきたと、とても既存都市のリノベーションと絡めて何かを分け持つという思考トレンドのなかにはない、これまでは、なかったというふうに思っています。日本はこの30年都市を広げてきたと、これ以上車は大変だから、やっぱり、30年くらいかかって都市をもう一回手前に引き寄せ、身近なものに引き寄せる努力をしようではないか。それが既存都市のリノベーションと関連した都市的整備区の整備というこの那須新都市のテーマ、それはそのきょうの主要な三大話(ばなし)としての「共生」であり、「創造」であり、「持続」であるということにも通底する問題だと思います。そう考えて例えば足利を考えたり、佐野を考えたり小山を考えたりしたいなあというのが、個人的なプランナーとしての心情と申上げても宜しいのではないかと考えています。

藤本：

はい、今度はヒーリングアートというような分野について、大変造詣の深い露木先生からお願いします。

露木：

これから創る新都市は、障害を持った方とかの区別ではなくて誰しものが幸福になる社会をめざすと捉えます。それでは幸福って何だろうというと、生きがいとか文化を考えないといけない。そうして都市をつくるときに、今、所謂バリアフリーがいわれているんですけども、もっと進んでユニバーサルになっていなければいけない、もうここは直したんですよ、あなたのために直したんですよっていうのはまだ目立っていて、決してその精神には充分なっていないわけです。

ですから、新都市を創る時にはその姿勢を高くいれていただきたいわけです。では、生きがいってなんだろうって。この新都市像のイメージ図には、このように緑がたくさんございますね。一人一人はその緑を花木・果樹・杉など、どういう緑と違ってらっしゃるか、どういう木と違ってらっしゃるか。例えば県南ですと、蛇祭ですか、あれは、草木・藁・竹とかで作られた蛇を使いながらお祭りをしますね。食糧の米や麦を生産し、その稲藁や麦藁を使って、祭りの道具や日常生活具など考案したり、働く一方で五穀豊穰・無病息災を願う精神文化を楽しんでいるわけです。各地の物産・特産とともに、民族芸能・風習など、様々な文化が緑の景観の中にかくれている。一人一人の持ち味や、その地を生かした生活が緑から見えてきます。木々の緑は草なる景色ではなく、様々な生活、すなわち生きがいがそこには存在している。

生きがいとか精神の安定を支える文化ということですが、長い歴史の中で私たちは、自然と係りなが

らいろいろな生活道具を含めた工芸品を作り使っているわけです。現在では、それを造る伝統技術保持者は高齢者が多いわけです。それを受け継ぐ若い人が少なく、その継続、継承、伝承が危ぶまれています。

史跡では、例えば小山ですと、国分寺と国分尼寺、日本三戒壇の一つの薬師寺があるわけですね。それによって精神的な文化がつけられていると思います。芸術の役割は、千年以上の歴史を経たものでも今なお感動を与え、生きつづけている。史跡などを通して、今まで見落としていたものを気がつく機会になってくる。

一人一人の本当に小さい精神的なものであっても、それが重なってきた時には、広い意味での福祉国家の新首都につながる可能性がある。それを我々がつくる機会、参加する機会、めったにない機会を与えられたわけですから、全県上げてそれぞれの生きがいと併せて考えていく必要がある。

藤本：

はい。ありがとうございました。

時間も残りすくなくなってきたんですが、それでは最後に前半後半を通して先生方、最後に一言ずつでもまとめにあたるようなご発言をいただいて、私のまとめめ役としての役割を減らしていただきたいと言う風に思うんですが。一つ宜しくお願い致します。

根岸：

では、ならんでいる順で私からまず口火を切りたいと思います。私は先程、露木先生から「文化財に登録したいような素晴らしい新都市をつくる」というお話をききまして、非常に感動を覚えたわけでございます。

「まちづくりをするときに、目玉になるものがないとまちづくりはできない」とよく言われます、文化財がなければ私たちが美しいまちをつくって、それを後世の人が文化財と認めてくれればいいわけですよ。そういう努力をしていこうと思いました。

柳川：

先程、ちょっとネットワークの話がでたんですが、どこかでそのネットワークの主体がですね、全体をまとめていくという作業をしなくてはいけないんですね。ですから、栃木県庁が一応そのまとめ役になりますと、県内の所でさし当たりクローズドな閉ざされたネットワークとって考えてよろしいんじゃないかという気が一つするんですね。

それから企業なんかでも、実は長期経営計画とか将来的プランニングとか、将来の会社の事業の仕組みをどう作っていくのかということをやゼロから描く仕事があるんですが、丁度その新しい首都というのは、新しい首都をですねゼロからデザインする仕事ですが、様々な問題を考えているかも知れませんが、これまでの都市もいろいろな問題を抱えているかもしれませんが、そういうところを、学んできたことを生かしていきながら、新しい街を作ることは、かなり、好ましいといえますか、面白いって行ったら語弊があるんですが、けれども結構楽しい仕事ではないのかなというのが、私の率直な感想なんです。いろんな夢を盛りこんでいって、その新しい街を作っていくと言うのは、大変クリエイティブというか、まさにここにある創造と言うのがあるのですが、創造的な仕事であると言う風に思います。ですから私自身はそれを、楽しみにしております。

藤本：

ありがとうございます。

福澤：

今日のようなシンポジウムでまだ那須に新首都が来ない、呼ぼうという、論脈の中で語られているので、そのところでのまとめという部分かわからないですが、こういうことはあると思んですね。新首都は国が作るんだと、国のイニシアチブがあることは確かですが国が作るんだと思っていたんでは、地域に何もおりてこない。地元地域で作り上げる物が地域に降りてくるのが僕は基本だと思います。

「国会都市群」という部分に関してはこれは国が作りなさいと、但しそれが分散するかもしれないし、よくわかりませんが、それ以外の都市整備区は、全部地域の知恵で、地域の人たちの主体性のある都市整備手法を、土地利用について根岸先生が心配されたことを含めてですけれども、都市整備手法を、自分のものにするによってしか新首都のいわば果実・成果は地域に降りてこないという考え方は必要じゃないのかというのは私の意見です。

露木：

やはり、子供、次の世代の子供のことを特に考えるわけです。これは凄いチャンスだと思うんですね。それは、那須は自然環境に恵まれている。しかし、ここの子供でも以外と自然を知らないということですよ。で、逆に自然が失われたアーバンライフ、人工的な都市生活をしている人は、植木鉢の自然、小さな自然に対しても大変関心を持つというか、その非常にアンバランスなのが今の現状だと思います。

環境教育、自然との関わり方を地域の方は御存知なので教えて下さるし、また、それを学ぶチャンスに出来る。現代の子供は、自然体験とか生活実感が非常に乏しいものですから、生命の大切さがおろそかにされている。そのため、現在はいろいろな殺伐とした問題が起きていると思います。

ですから、生命の大切さとか、生きる喜びとか、森羅万象の自然現象、社会現象を自分の五感を通して直接的に感じとれる力を養う機会に出来たらと思います。だから、来る来ないはともかくとして、自分がどこでも生きられる五感を磨き直すための大事ないいチャンスではないかなって捉えています。

藤本：

はい。ありがとうございました。

ということで、私のほうでまとめる必要がないかと思いますが、最初論点の一つとして調査地域の適否の論議もあるということも申し上げたのですけれども、私自身今迄の移転審議会の各地域のヒアリング結果を読んでいて、北東地域、特に那須野が原地域の可能性と言うのは、大変高いのではないかなというようなことを感じておりました。

ただこれやはり、政治的な決着ということもございまして、今年の秋頃という予定のようですけども、まずこれは、どうなるかわからないということもございまして。ただ今回のテーマの問題でいけば、やはり私たちの街づくりというのは、やはり持続的でなければならない、やはり、今ある自分たちのまち、村をどういうふうにしていくかというですね。その理念が必要だということですね。その意味ではその新首都づくりの理念としては、大変豊富に出てきてきているわけですから、やはりこれを念頭に置きながら、今ある自分たちの街や、村を持続的にどうしていくのかというあたりですね、リノベーション、こういう方向でこの新首都の問題も捉えていければこの県南地域においても、必ずしも、温度が高くない地域でもですね、この新首都の問題というのは充分参考にしていけるでしょう。また県の発展という大局的な観点で寄与するのではないかと、その辺をご理解いただければ今日のセミナーは、よかったということになるのではないかなと言う風に思っております。時間になりましたので、これでセミナーを閉じさせていただきたいと思っております。四人の先生方どうもありがとうございました。